

御城だより



首里城基金復元事業 紅型資料の復元製作

焼失を免れた資料でも無傷というわけではなく、湿度や高温の環境にさらされ損傷を受けました。
これらの資料を再び展示することは難しいため、令和4年度より復元製作を行い、
その途中経過を一部ご紹介します。

『紹織染分地鶴と松梅菊両面紅型胴衣』の修理



資料概要

- 【名称】ろおりそめわけじつる紹織染分地鶴と
まつうめきくりょうめんびんがたどうじん松梅菊両面紅型胴衣
- 【寸法(cm)】身丈95.0 / 衿77.0 / 袖丈26.0
- 【素材】絹
- 【製作年代】19世紀

五つ紹と平織組織で製作された柔らかな絹布地に紅型が染められた胴衣(ドウジン)。両面染め。黄・赤・紫色の3色による染め分け地に、鶴・松・梅・菊の繊細な模様が両面に染色されています。

また、原資料の色材については非破壊色材調査の結果、白は鉛白、黄は石黄、赤は朱、紫は臙脂、緑は石黄とベロ藍の混色、灰色及び黒は墨であることが判明しました。

火災の影響

首里城火災によって被災した『紹織染分地鶴と松梅菊両面紅型胴衣』は縦方向にシワが入り、部分的に変色してしまい被災前の色鮮やかさが失われてしまいました。

縦方向のシワ



変色



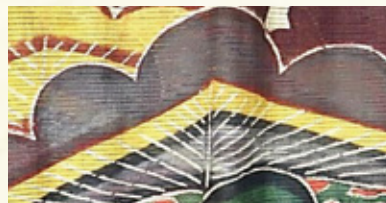
被災前



被災後



被災前



被災後

復元製作の目的

染料や顔料の成分自体が変化し変色したため、被災前の状態に戻すことはできません。また、火災の熱により絹の生地が硬くなってしまい資料の取り扱いが難しいことから従来の衣桁での展示に適さない状態です。

この資料の類似資料として『染分地鶴松梅菊文様子供着』(沖縄県立博物館・美術館所蔵)、『染分地松鶴梅菊模様衣裳』(女子美術大学資料館収蔵)などがあり、沖縄県立芸術大学が所蔵する鎌倉芳太郎資料にも類似する型紙があることから復元製作することができると判断しました。

復元製作には様々な目的がありますが、単なる代替品の製作ではなく、この資料は両面染めの紅型であることから両面が使える糸掛け型紙を製作するなどの古典的な技術が必要であり、型紙から復元製作することによる技術の保存も目的としています。



復元品完成までの道のり

復元製作は充分な類例(類似資料)調査を行い、どのような材料、道具を使って製作するのか、どの程度の製作期間が必要かを所蔵者と製作技術者、研究者などと話し合って決めます。この資料においては5か年の計画を立てています。

- 2022年(令和4年)類似資料・型紙調査、製作仕様の検討、白地絹紹織布製作
- 2023年(令和5年)下絵・型紙製作
- 2024年(令和6年)試作品製作
- 2025年(令和7年)本製作
- 2026年(令和8年)縫製(単衣仕立て)

型紙製作について



復元製作はこれまでに白生地製作と下絵・型紙製作まで進めています。

ここでは令和5年度に行った型紙製作の工程をご紹介します。

復元製作

類似資料調査

沖縄県立芸術大学が所蔵している『鎌倉芳太郎資料 紅型型紙第一巻』に掲載されている類似資料の熟覧調査を行った。

型紙図案の製作

原資料から型紙となる部分の図案を描き起こし、原資料で確認できない曖昧な部分については熟覧調査した鎌倉芳太郎資料の型紙を参考に補完し、図案を作成させた。

図案のトレース

型紙に転写するため、トレーシングペーパーに図案の線を描き、型紙に写した。



型彫り

転写した線に沿ってルクジュウ（乾燥させた豆腐）とシーグ（小刀）を使用して型彫りした。ルクジュウは豆腐を乾燥させたもので、型紙の下に当てて彫ることでカッティングマットのような役割となる。ルクジュウの利点は、紅型の彫りは刃を引いて切るのではなく、突き彫りと言って突きながら型紙を彫る（切る）ため、刃を受ける適度な硬さと復元力があること、繊維が無いため小刀の刃を動かしやすいことなどがあげられる。



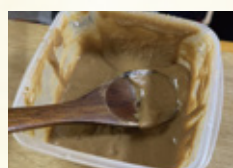
オリジナルの資料を再構成して製作した図案



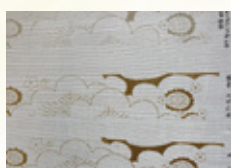
糸掛け

型紙を彫ると彫り抜かれた部分と型紙の接点が少なくなるため、糸を縫い付けて型紙が動かないように固定する。

糸掛けの糸は絹を使用。両面染めでは糊置きを数十回行うため、糸が切れないように考慮しなければならない。糸の強度を持たせるため柿渋を糸掛けした型紙の両面に数回塗布した。



糊作り



糊置き実験



試し染め

実際に使える型紙であるか確かめるため、糊置きをして防染するための糊の硬さの実験や試し染めの実験をし、型紙を完成させた。



完成した型紙

〔製作者〕白生地製作：山城有希子 紅型型紙製作：古紅型研究会群星

首里城基金

未来へ残そう沖縄の心

貴重な美術工芸品等の 収集・復元・保存・人材育成に向けて

首里城は沖縄の歴史文化を象徴する貴重な文化遺産でしたが、沖縄戦において、多くの文化遺産が灰塵に帰したり、国内外に散逸してしまいました。

約450年にわたる琉球王国の王府としての首里城復元は、県民の長年の悲願でありました。

首里城の建物については、国、県及び関係者のご尽力により本土復帰記念20年事業として1992年11月に47年ぶりに復元され、首里城公園として一部開園し、2019年2月には全面開園されました。



一方、展示物については、国内外に散逸した首里城関係の文化遺産を収集し、復元し、首里城等で一般公開していくため、県、市町村、各種団体、また多くの方からの協力を得て、首里城基金が財団に設置され、これまで文化遺産収集事業を続けてまいりました。

しかし、2019年10月31日、首里城は火災で焼失し、貴重な美術工芸品も391点が焼失しました。

首里城の再建に向けた動きが加速するなか、偉大な先人たちが残してくれた貴重な美術工芸品等の遺産を収集・復元・保存し、首里城で展示できるよう、首里城基金の造成に皆様方の絶大なるご支援、ご協力賜りますよう、心からお願い申し上げます。

首里城基金の仕組み

首里城基金は、首里城での文化遺産収集事業に役立てられています。

基金への寄付金等

基金の運用益

文化遺産収集事業
首里城に関する資料収集

収集 国内外に散逸した文化遺産を収集します。

復元 破損または消失した遺産を復元します。

保存 次の世代のために文化遺産を保存します。

育成 修理・復元・保存に必要な人材育成をします。

展示・一般公開

首里城
公園HP



ON
THE
TRIP

